

群 教 七	G01 - 02
	平26.254集
	国語 - 小

文学的な文章に関心を持ち、叙述を基に想像を広げて読む力を育てる指導の工夫

— 「行動を表す叙述」に着目させる言語活動を通して—

特別研修員 早川 留美子

I 研究テーマ設定の理由

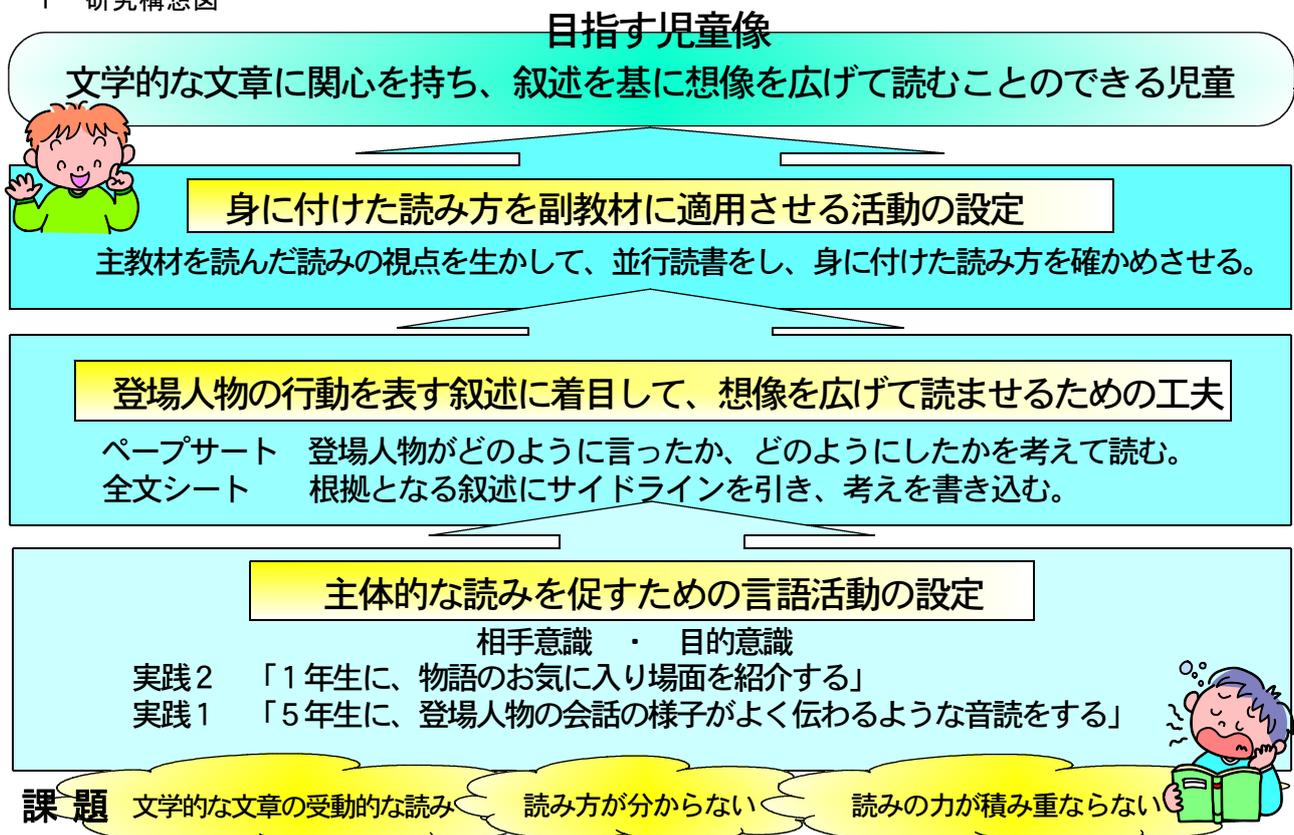
本学級の児童は多くが、図鑑や、絵や写真などが多分に掲載されている本を好み、文学的な文章を進んで読む児童は少ない。また、文学的な文章を扱った授業では、一部の児童の発言を中心に、順序よく読み取るだけの授業展開になってしまうことが多く、一人一人の読みの力を高めることができていないと感じている。これは、文学的な文章を読む授業において、多くの児童にとって受動的なものになっていること、学習で身に付けるべき力が曖昧で、読み方が分からないことが原因ではないかと考えられる。

そこで、文学的な文章における「読むこと」の指導において、児童が目的意識を明確に持ち、主体的に活動することができるような単元の開発を行う。特に低学年においては、基礎的な能力の育成という発達の段階から、「行動を表す叙述」に着目させる言語活動を位置付け、叙述に即して読むという読み方を認識させることから学習させていく。このことは「はばたく群馬の指導プラン」においても、伸ばしたい資質・能力として挙げられている事項である。

低学年の段階で「叙述を基にして読む」という読み方を身に付け、その読み方で読書経験を積み重ねていくことは、その後の「読むこと」の力の更なる伸長へとつながっていくものと考え、本主題を設定するものである。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

実践1における研究上の手立て

単元名 音読発表会を開こう 教材名「お手紙」

- 1 主体的な読みを促すための言語活動の設定
 - ・「5年生に、登場人物の会話の様子がよく伝わる音読をする」という言語活動の設定。
- 2 登場人物の行動を表す叙述に着目させるための工夫
 - ①全文シートを活用し、主語を意識させたり、サイドラインを引かせたりして、どのように読むか、考えを書き込ませる。

単元を貫く言語活動を、「縦割り活動でお世話になっている5年生に向けての音読発表会」という具体的な活動に設定したことで、児童は目的意識、相手意識を持って読むことができた。また、全文シートの活用により、誰の会話文なのかを、文章全体を何度も読み返して文脈から読み取り、音読の工夫を考える姿も見られた。しかし、一つの教材文での言語活動にとどまり、身に付けた読みの力を活用している姿を見ることができなかつたため、次単元では、手立てを追加改善した。

実践2における研究上の手立て

単元名 ペープサートで、物語のお気に入り場面を紹介しよう 教材名「きつねのおきやくさま」ほか

- 1 主体的な読みを促すための言語活動の設定
 - ・「1年生に、物語のお気に入り場面を紹介する」という言語活動の設定。
 - ・「お気に入り場面」を自ら選んで読む、という学習場面の設定。
- 2 登場人物の行動を表す叙述に着目させるための工夫
 - ①全文シートを活用し、登場人物の言動に、サイドラインを引かせたり、「どのように言ったのか」「どのようにしたのか」について考えを書き込ませる。
 - ② ①を行った上で、ペープサートで具体化させる。
- 3 身に付けた読み方を副教材に適用させる活動の設定
 - ・主教材を読んだ読みの視点を生かして並行読書をするすることで、学んだ読みの力を確かめさせる。

III 研究のまとめ

1 成果

- 児童の実態に寄り添った単元を貫く言語活動を設定したことにより、目的意識や相手意識が明確になり、主体的に文学的な文章を読む姿が見られた。
- 全文シートを使って音読の工夫やペープサート劇の工夫を考えさせたことにより、行動を表す叙述に着目し、その叙述を根拠として、想像を広げている書き込みや発言が見られた。
- 本実践に関わる授業を通して、児童に、他の文学的文章を読む時も、学んだ読み方を活用しようという意識を身に付けさせることができた。

2 課題

- 更なる語彙の獲得機会、読書機会を保障し、自らの読書経験や生活経験と、叙述とを結び付けて想像を広げる読み方をより多く体験させることが必要である。

3 提言

- 発達段階に応じた指導事項を精選し、身に付けさせる力を明確にして単元構成をすることが、想像を広げて読む力の伸長につながる。低学年では、音読やペープサートを取り入れた言語活動は、行動を表す言葉に着目させるのに有効である。並行読書を設定することは、教科書教材で身に付けた読み方を、児童の日々の読書体験の中で活用させていくための基盤となる。

<授業実践>

実践 1

- 1 単元名 「音読発表会を開こう」
教材名 「お手紙」三省堂（第2学年・1学期）

2 本単元及び本時について

教材文「お手紙」は、合計32の登場人物の会話文で物語が展開しており、地の文や会話文に登場人物の行動の様子や行動の変化がはっきり描かれている。会話文を中心に、主語を見つけて、誰が言ったことなのかを確実に捉える力を身に付けさせるとともに、どのように言ったのかを叙述に即して考えさせることで、想像を広げて読む力を育てていく。また、単元を貫く言語活動として設定する「5年生への感謝の気持ちを込めた音読発表会」により、相手意識、目的意識を持たせ、主体的な学習を促す。

本時は、一番心に残った会話文を決めて、音読の工夫について考えさせた。工夫の根拠が叙述の中にあることを意識させるために、「どうしてそう読むのか」と発問し、児童用の全文シートに書き込みをさせたり、教室側面に掲示した全文シートにサイドラインを引きながら全員で確認させたりした。

3 授業の実際

- (1) 一番心に残った文を決めて、児童用全文シートにサイドラインを引かせる（図1）。
- (2) 音読の工夫について考えたことを行間に書き込ませる。
- (3) どうしてそのように読むのか問いかけることで、音読の工夫の根拠となる叙述を、全文シート（掲示用）で確認し、全員で共有する。
- (4) 書き込みのある全文シート（児童用）を見ながら、ペアで音読を聞き合い良いところを伝え合わせる。
- (5) ペアでの交流後、全文シート（児童用）に、考えたことや音読の工夫を書き足す。

行動を表す言葉に着目して、想像を広げて読ませるための工夫

◎ 心に残った会話文の選定

S 1 : 「とてもいいお手紙だ。」が心に残ったよ。

S 2 : 「ああ。」は短いけど、大切な会話文だな。

T : 5年生に、がまくんが言っている様子が良く伝わるように、音読の仕方を、工夫しましょう。音読の工夫を、会話文のそばに書き込みましょう。

S 1 : 「とてもいいお手紙だ。」は、感心しているように読みたいな。

S 2 : 「ああ。」は、手紙にうっとりしているように読んでみよう。

T : 「とてもいいお手紙だ。」は、どうして感心しているように読むのですか。

S 1 : かえるくんのお手紙に『きみの親友、かえる』と書いてあるからです。そんなふうに言ってもらったら、感心すると思うからです。

T : 「ああ。」は、どうしてうっとりしているように読むのですか。

S 2 : ずっと待っていたお手紙がやっと来ると分かったからです。

T : がまくんがお手紙をずっと待っていたことが分かる場所はどこでしょう。

S 3 : 「がまくんは、げんかんの前に座っていました。」のところです。

S 4 : 「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」というところです。

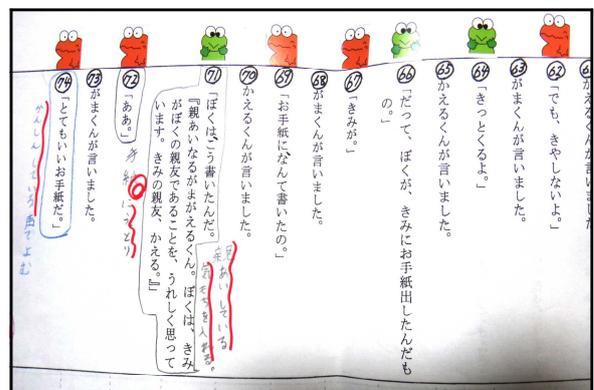


図1 児童用全文シート

主体的な読みを促すための言語活動の設定

◎単元に入る前に、5年生から手紙をもらう活動を取り入れることで、教材（「お手紙」）の内容理解への手がかりにさせる。

①単元の導入時に「音読発表会をしよう」という言語課題を提示する。相手や目的がはっきりするように児童と話し合い「5年生に物語の内容がよく伝わるように音読しよう」というめあてを設定する。

②単元を見通した学習予定を常時提示しておくとともに、児童にも学習予定表として配布し、毎時の振り返りを記入させる。

③5年生との交流活動として位置付ける（図2）。

◎導入時「お手紙」を読み聞かせした後に、以下のように、児童と話し合っ、具体的なめあてを設定していった。

T： 今度の学習では、音読発表会を開こうと思います。誰に聞いてもらいたいですか。

S1： おうちの人に聞かせたいな。

S2： 読み聞かせをしてくれる司書の先生はどうか。

S3： この間5年生にお手紙をもらったよ。勉強を頑張っって書いてあつて嬉しかったよ。

S4： 5年生には、なかよしタイムでいつもお世話になっているね。

T： いつもお世話になっていて、みんなの頑張りを応援してくれている人に聞いてもらえるのはいいですね。

S5： 「お手紙」の音読をみんなで頑張っって、5年生に感謝の気持ちを届けよう。



図2 5年生に音読を聞いてもらう様子

〈5年生からの感想メッセージカード〉（図3）

〇〇ちゃんへ

すらすら読めていて、とても上手だったよ。登場人物になりきっていて、絵を見なくても、その風景をイメージできたよ。二年生でこんなに上手に読めるなんてすごいと思うよ。これからも、音読をがんばってね。〇〇ちゃんはすらすら読めたから大丈夫だよ。

がんばってね。

△△より

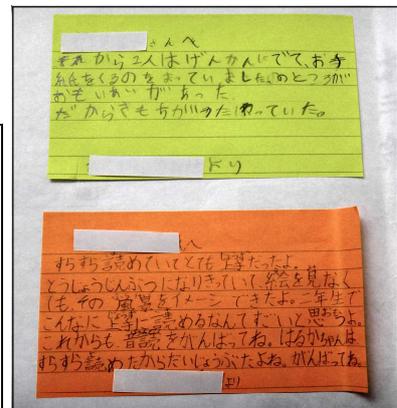


図3 メッセージカード

4 考察

- 一対一での音読発表会を設定したことで、一人一人の児童が、5年生に聞かせたい、物語が良く伝わるように音読したい、という意欲を継続して学習活動に取り組むことができた。
- 会話文に着目することを単元を通して積み重ねてきたことで、文脈から、誰の会話文なのかを捉える力が付いてきた。
- 全文シートへの書き込みによって、叙述を基にして考える読み方が身に付いた児童が増えたと言える。また、全文シートで文章全体を見渡すことにより、作品を概観して読んだり、全体の構造をつかみながら読んだりする力の育成につながった。
- 単元を通して一つの教材を読む読み方では、その力が活用できるものになっているか、習得の状況の見取りが弱くなってしまふ。主教材（教科書教材）以外の文章を読む、並行読書の必要性を感じた。

実践 2

- 1 単元名 「ペープサートで、物語のお気に入り場面を紹介しよう」
教材名 「きつねのおきゃくさま」三省堂・「こんとあき」「空とぶライオン」ほか（第2学年・2学期）

2 本単元及び本時について

主教材として用いる「きつねのおきゃくさま」は、登場人物が児童に親しみやすく、中心人物の行動は、昔話の語り口で繰り返しの中に描かれる。そのため、相手と関わり合っ少しずつ変化していくその行動は、児童にとって様子が捉えやすく、共感できるものである。また、同様の特徴を持つ題材「しまうまのしゃっくり」「空とぶライオン」「こんとあき」を副教材として用いる。

手に持って動かすことができるペープサートを取り入れることで、児童は、誰のペープサートを作ろうか、どのように動かし、どのように音読しようか、と考える。この時「登場人物は誰で、何をしたのか、なぜしたのか」「どんなことを、どのように言ったか」などの視点を持って物語を読むことができる。読んだ物語文のお気に入り場面を、ペープサート劇で1年生へ紹介するという単元を貫く言語活動を設定することで、相手意識、目的意識を持たせる。また、主教材の学習を通して身に付けた「登場人物の行動に着目して読む」という読みの力を確かめることができるよう、副教材に適用する活動を位置付ける。

3 授業の実際

- (1) 中心となる登場人物の言動を中心に、物語のお気に入り場面を決める（副教材についても同様）。
- (2) 登場人物の行動を表す叙述にサイドラインを引かせる。児童に親しみやすいように「したこと言葉」「言ったこと言葉」という言い方で示す。
- (3) ペープサートの動かし方や、音読の仕方の工夫を考えさせ、考えたことを行間に書き込ませる。
- (4) どうしてそのように読むのか問いかけることで、ペープサートの動かし方や音読仕方の工夫の根拠となる叙述を、全文シート（掲示用）で確認し、全員で共有する。
- (5) 「したこと言葉」「言ったこと言葉」を中心に、「もっと上手に音読するための秘密」はないか、と課題提示し、文章全体を見通して、登場人物の行動の様子を叙述から詳しく読むことに着目させる。
- (6) 書き込んだ全文シート（児童用）を見ながら、ペアでペープサート劇を見せ合い、交流する。
- (7) ペアでの交流後、全文シート（児童用）に、考えたことや音読の工夫を書き足す。

行動を表す言葉に着目させるための工夫【ペープサートの活用】

S1：「みぶるいした」ところは、「ぶるぶると」と書いてあるから、小刻みに揺らしてみよう。

S2：わたしは、「ぶるぶると」は「お兄ちゃん」と言われたので、恥ずかしかったからだと思います。

T：したこと言葉だけでなく「ぶるぶると」や「お兄ちゃん」もペープサートを動かす時に役に立つ言葉ですね。

S3：ぼくは、「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」を工夫しよう。激しい声で読むといいな。

T：どうして激しい声で読むのですか。

S3：「ゆうきがりんりんとわいた」からです。

S4：「そのばんきつねは死んでしまう」のだから、きつねは死ぬ程、頑張ったのだと思います。

T：言ったこと言葉だけでなく、「ゆうきがりんりんとわいた」「そのばんきつねはずかしそうにわらって死んだ」も音読する時に役立つ言葉ですね。



図4 主教材で発表している様子

「したこと言葉」や「言ったこと言葉」だけでなく、それらを詳しくしている言葉や、意味が繋がっている言葉も、ペープサートを動かしたり音読したりするのに大切な、「秘密の言葉」であると、全体で共有し、各自の適用教材の読みへと移行した（図4）。

主体的な読みを促すための言語活動の設定

◎導入時、ペープサート劇のモデルを見せるとともに、以下のよう
に児童と話し合っ、具体的なめあてを設定していった。

T： 今度の学習では、みんながそれぞれ選んだお話のお気に入りの場
面をペープサート劇にしていきます。

S 1： どのお話にしようかな。

S 2： 校長先生に見せたいな。

S 3： この間の運動会で、1年生と大玉転がしを一緒に頑張ったよ。

S 4： 1年生に上手なペープサート劇を見せて、お手本になれるようにしよう（図5）。



図5 1年生にペープサート劇を見せる

身に付けた読み方を副教材に適用させる活動の設定

①導入時に読みたい本を自分で選ばせる。教室に学級文庫として期間を決めて展示し、いつでも読める環境作りを行う。朝読書の時間も活用する。また、家庭学習でも良いことを伝え、並行読書への取り組みを学級通信で家庭に連絡する。

②主教材で学習した方法と同じやり方で、副教材を読む。児童が主体的に読み進めている時間は、自力で読むのが困難な児童の個別支援にあてる（図6）。

T： 「きつねのおきゃくさま」で勉強した時と同じように、自分で選んだお話も、ペープサート劇をするのに大切な言葉を探して印を付けましょ

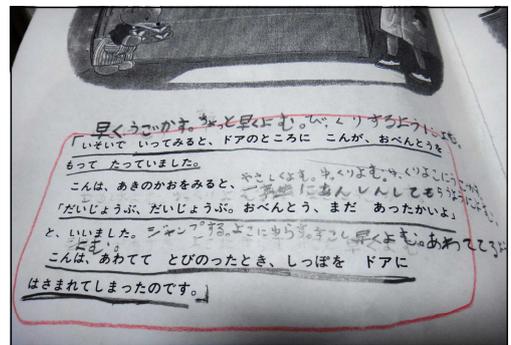


図6 副教材の全文シート

に、自分で選んだお話も、ペープサート劇をするのに大切な言葉を探して印を付けましょ

時間	主な学習活動	主教材	副教材
1	単元のめあてをつかみ学習の見通しをもつ。	*	*
2	物語の大体をつかむ。	*	
3	物語の大体をつかむ。		*
4	物語のお気に入りを見つける。	*	
5	物語のお気に入りを見つける。		*
6	ペープサートを作る。	*	*
7	ペープサートの動かし方や音読の仕方を考える。	*	
8	ペープサートの動かし方や音読の仕方を考える。		*
9	ペープサートでお気に入り場面を上手に紹介するための秘密を見つける。	*	*
10	ペープサート劇の練習をする。		*
11	自分で選んだ物語文を、ペープサートで1年生に紹介する。		*
12	単元全体を振り返り学習のまとめをする。	*	*

図7 学んだ読み方を副教材に適用させる単元計画

S 1： ペープサート劇を上手にするためには、「したこと言葉」や「言ったこと言葉」を見つければいいんだな。

S 2： 「急いで行ってみると」は「したこと言葉」だから線を引こう。ペープサートを早く動かして、急いでいる感じを出そう。

S 3： 「かぎ」がついているのは「言ったこと言葉」だから線を引こう。少し早く、慌てているように読もう。

4 考察

- ペープサート劇を導入することにより、叙述における登場人物の「したこと言葉」「言ったこと言葉」に着目することができた。動かし方や音読の仕方の工夫を考えることが、叙述を根拠に想像を広げて読むことにつながった。
- 学んだ読みの力を適用して、自分で選んだ本からお気に入りの場面を読む活動を設定したことで、児童に学習の目的が明確になった（図7）。
- 交流が感想にとどまらないよう、「アドバイスをする」という視点で、友達の読みを聞かせることが肝要であることが分かった。そのことにより、共に叙述に戻り、読み重ねている姿が見られた。